



# 幼児の 教育

家庭・保育所・幼稚園

好評発売中!

# 名のない遊び

塩川寿平 著

一般に、遊びを語るときには遊びに名前(ままごとなど)をつけて呼ぶ。しかし、乳幼児の発達過程で見られる遊びを観察していると、文字や言葉で簡単に言い表せない行為や行動、つまり「名のない遊び」が意外と多いことに気づく。本書では、具体的な事例をもとに、乳幼児期における「名のない遊び」の重要性について語る。



## 名のない遊び

塩川寿平・著



フレーベル館



26×21 cm  
96頁  
定価2,100円  
(税込)

### 目次から

#### 第1章 「名のない遊び」とは

「名のない遊び」とは何でしょうか／「名のない遊び」はなぜ重要なのでしょう  
「名のない遊び」とカリキュラム／「名のない遊び」と幼稚園教育要領・保育所保育指針

#### 第2章 カメラがとらえた「名のない遊び」

水と／友だちと／入る／食べるのも遊び／落ち葉と／どろんこ／棒で／走る／寝る  
重ねる／ここが好き／ミミズ ほか

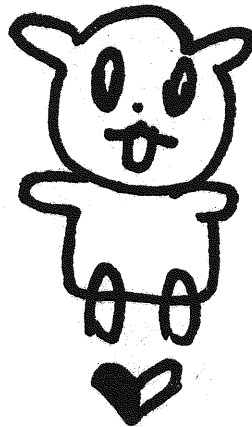
キダーブックの

## フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第105巻 第9号



# 幼 児 の 教 育 目 次

— 第一〇五卷 第九号 —

© 2006  
日本幼稚園協会

巻頭言 「子どもの最善の利益」について思う……………阿部 和子…(4)

ある日……………(8)

特集〈遠足・園外保育〉

『遠足』百景……………永倉みゆき…(10)

宿泊保育の取り組みから……………山路 純子…(16)

広い空の下で……………目羅 愛…(22)

十一月二日 千葉「加曾利貝塚博物館」遠足日記……………鈴木 眞廣…(28)





女性の心と体に忍び寄る危険(1)―思春期から成年へ―……………大森 美香…(35)

流れるイメージと、流れをつくるテーマ……………津守 眞…(40)

私を通った幼稚園・保育園(13) 保育園、甘き思い出……………伊集院郁夫…(46)

幼稚園百三十年記念企画 アークイブズ『幼児の教育』(3)……………(52)

「恩師」との出会い……………本間万里子…(58)

表紙絵／さのまきこ

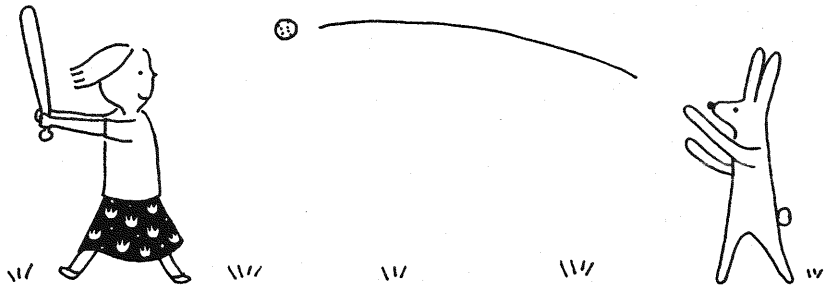
扉題字／津守 眞

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／さのまきこ

編集委員／浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子

編集部／河合 聡子



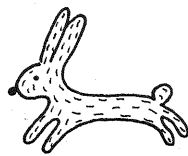
## 巻頭言

# 「子どもの最善の利益」について思う

阿部 和子

大学の改革が話題となって久しい。A短期大学で行われた、平成十七年度の文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に選定された授業実践の取り組みをみてみたい。それは、B山村に移動して展開される授業で、入学してすぐの五月に実施される。

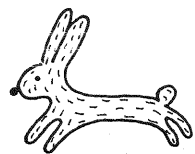
学生は、自分の日常（ようやく慣れた大学生生活）を離れて、見知らぬ土地で見知らぬ村の人たちや、あまり親しくない友だちと八日間過ごすことになる。



この実践のメインの活動は、グループに分かれ、与えられた材料だけを使って一つのものに限られた日数で完成させるというものである。課題を遂行するに当たって、学生たちは一様に、道具の使い方などに対する自分自身の力量と、知らない人と一緒にすることができるとかどうかの「不安」をあげている。しかし、ここでの生活は、自分で動かなければ何も始まらない。たとえ、動かすにしようとしても、八日間という期間では動かすにはいられないという状況にある。

感想レポートでは、この移動教室でのさまざまな活動の中で、多くの学生がこの課題を「忘れられない経験」としてあげている。期限付きの課題は、躊躇することを許さず、とにかく、身体を動かし知恵を出し合いながら、試行錯誤するしかない。自分だけが動いてもうまくいかないことに気づいて、メンバー間に対話が始まり、対話を通して、お互いのイメージも明瞭になり、話し合いを重ねながら行動した結果が姿を現してくる。その出来具合が、行動の過程を具体的に見せてくれる。さらに、完成に近づいていくことが学生たちの意欲を刺激する。こうして、できあがったものが、グループの一体感の象徴となることで、「みんなが一つになった」という実感をもつことになり、忘れられない経験として位置づくことになるのだと思う。

この事例から、「自分の身体を使って相手（材料や、一緒に作る仲間）に働きかけること」、つまり、直接に経験することが学生たちの「ここの今」にリアリティをも



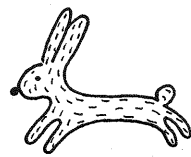
たせ、忘れられない経験となつてゐることが理解できる。

これは大学の授業実践であるが、人の生活の確かさは、自分であれこれ思い悩み、行動し修正しながら周囲に働きかけ・働きかけられることを再確認させられる。しかし、私たちの生活において、心揺さぶられながら生身の身体で、具体的に周囲にかかわり・かわられることが少なくなつてきていることが指摘されて久しい。そして、子どもの生活において、このような直接経験の重要性が叫ばはしても、そのような取り組みが増えてきているかという点、必ずしもそうはいえない現状にある。

一方で「学力低下」がいわれ、これまでの義務教育のあり方が問われている。国をあげて、公立私立を問わずさまざまな取り組みが行われ、「新しいタイプの学校運営のあり方に関する実践研究(全国の七つの小学校が指定されている)」など、これからの学校教育のあり方が研究され始めている。

いまだに先が見えない中で、ある私立の小学校では、図書館の充実(蔵書三万冊)、二クラスが合同で授業を行えるスペース、給食は某有名ホテルに委託しているなどの環境を整えていたりする。

これらの取り組みは、子どもの発達を憂いて、現状を何とか打開して「子どもに子どもの生活を保障する(子どもの最善の利益)」ことを標榜しているのだと思う。しかし、子どもの最善の利益とは何かを考えてのことだろうか。

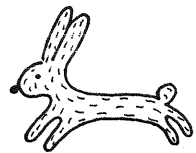


私たち大人は、激変する世の中を一緒に生きるということを考えて、子どもに向かい合っているだろうか。現在をより善く生きながら、望ましい未来を作る主体として子どもに向かい合っているだろうか。また、私たち大人は、われわれの生きている社会をどのように描き、その実現のために心を砕いているだろうか。子どもの将来を憂慮するということは、子どもとの生活の未来を含んだ現在を考えることだと思う。

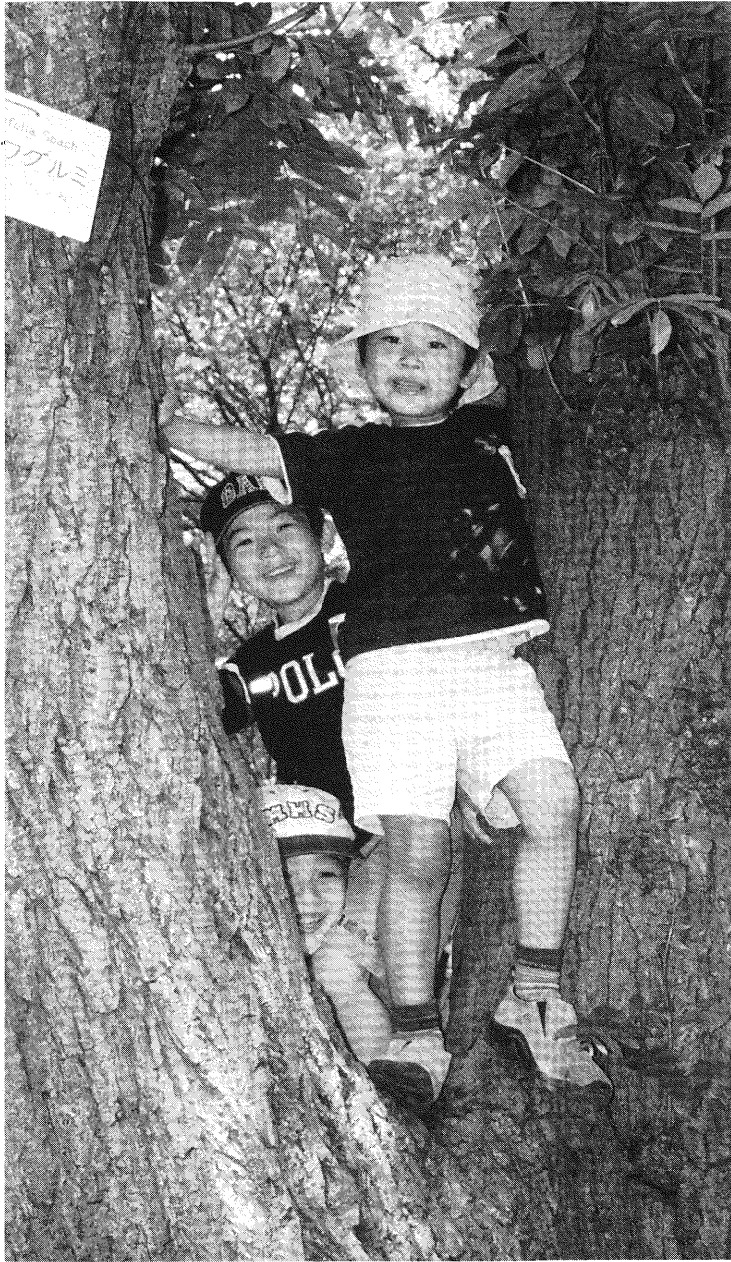
子どもは、抽象的な空間で生きているわけではなく、今、ここでの具体的なやり取りの中で生活し、そのやり取りを通して、その周囲を吸収し世界を広げていく。

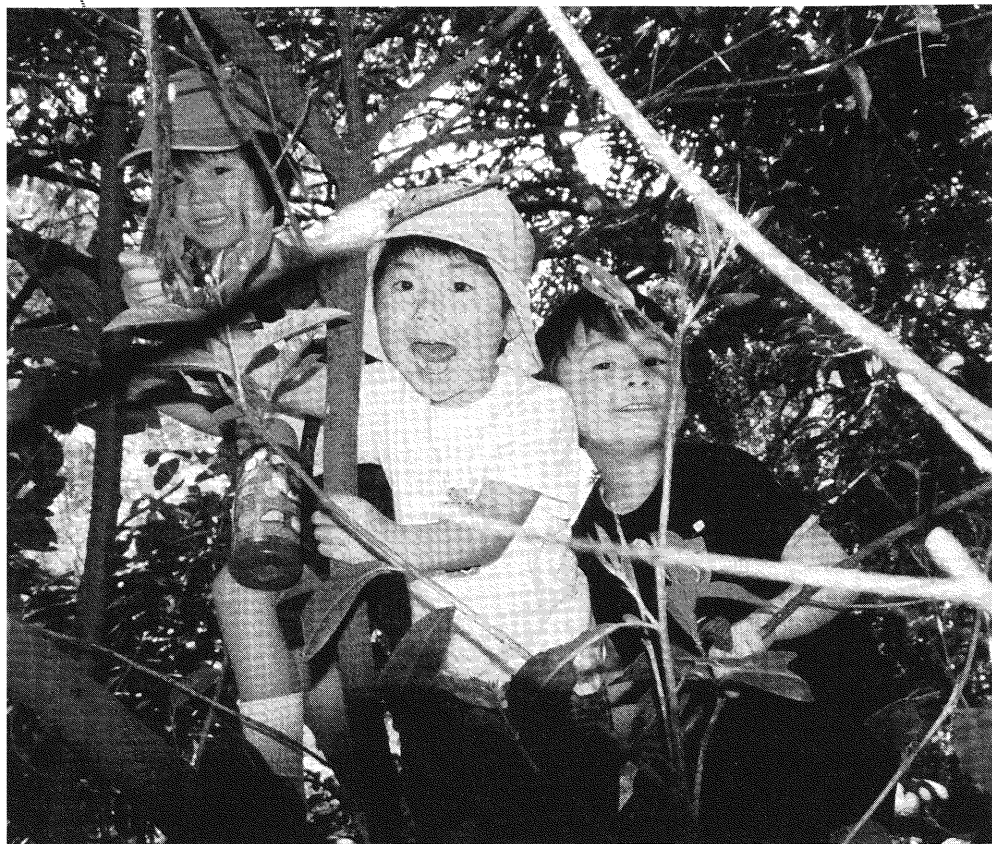
大人自身のあり方も含めて、子どもと一緒に生活するということをもう一度、考え直してみたい。子どもが、実感をもつてかわられる環境をつくりたいと思う。自分自身の身体で、ものや人に触れ、悩み、苦しみ、喜び、悲しみのある生活を共にすることを実行したいと思う。子どもとの今を考え、環境を整え、そして、そこでの感情の揺れ動きにつきあうことは、骨の折れることでもある。冒頭に紹介した授業実践において、移動教室を成り立たせ、成果をあげているのは、この実践を支える多くの教員の願いや労力、村の人が学生に心を砕き、迎え入れる体制があつてのことである。子どもの最善の利益とは何かをいつも問いながら、目の前の子どもとの生活に心を砕くことが重要であると考える。この延長線上での乳幼児の生活や、これからの義務教育のあり方の模索でありたいと思う。

(大妻女子大学)









撮影・平野 清

# ある日

特集 〈遠足・園外保育〉

『遠足』百景

永倉 みゆき

一 私から『遠足』を望む

幼い頃の私にとって、遠足という文字の中にある『遠』の字には、憧れのようなうつつとりするような響きがあった。いつも通っている所を遠く離れて、普段できないことができる日、遠足。たとえば、普段のおやつよりずっと多い量のお菓子を持つていくこともできる。前日から準備に取りかかるのだが、当時は、今のようにお菓子も近くのスーパ―に多種

揃っているわけではなく、当然、遠足用のお菓子は母の自転車の後ろに乗って、はるばる商店街まで買っていくこととなる。遠足は、その準備から既に「遠く」日常から離れていくものだったのである。そして、この「楽しみに待つ」ということが、遠足にとってどれだけ大切なことであったのかと、今になってひしひしと感じている。また遠足というと必ずといっていい程、前日あたりから急に雲行きが怪しくなったのはなぜか。何のことはない、つまりは

子どもであった私にとって、普段天気というものは気にもかけないものだったのだろう。唯一晴れを願ったのが、この『遠足』という特別な日だったのだ。

このように、私にとっての遠足の思い出というのは、行って何かをしたことよりも、それを待っている時のほうがずいぶん多いように思う。『遠足』を待つ時間の中で、私はたつぷりと『遠足』について期待をし、想像の中で味わいつくしたのである。期待が大きいものほど失望も大きい。かくして大きな期待をリュックにいっぱい詰めた私は期待と違ふ「あつ」という思いを何度か味わうことになる。そのようなわけで私にとっての遠足は、目的地に着いた時点で、もう楽しみの内の四分の三くらいは終わっていた。もつともこれは私から見えた『遠足』の景色なので、他の人もそうだったのかは定かではない。

## 二 先生から『遠足』を望む

初めて勤めた小学校は、山深い里の小学校だっ

た。毎日車で四十分ドライブしながら通った学校である。休み時間にクラスの子全員（十二人）と野いちごを採りに行って、次の授業がなくなってしまうような、そんなのんびりした毎日だった。天気がいいと、給食を校庭のベンチまで持って行って皆で周りの豊かな緑を眺めながら食べた。「あの山は怪獣みたい」「あの雲がくじらぐもかなあ」「ぼく、あの滝まで登るのが夢なんだ」。私自身にとっては、毎日が『遠足』みたいなものだった。保育園でよく行く「お散歩」、大人でいう「散策」を、はからずも私は毎日のようにこの学校の子どもたちと楽しんでいたのである。

そんな、敢えて遠足に行かずとも十分自然に恵まれた学校の遠足は、ここに通う子どもたちにとって一番遠い所「海」に行くことであった。海に着いた子どもたちは、私の子どもの時の遠足の十倍くらい嬉しそうだったように記憶している。今でもあの学校は、まだのびのびした学校でいるのだろうか。子

どもたちはまだ「海」が遠い所だと感じているのだろうか。

次に勤めた幼稚園もまた、自由感にあふれる園だった。四月、年間計画を決める時に、入園、進級した子どもたちの顔を見て「さあ、今年は運動会をやることにするの。どうするの」といったことをわいわいと話し合った。遠足も然り。その時のメンバーを見て、虫をとるのが好きな子が多いと「虫とり遠足」「ザリガニとり」などを計画し（行きたくなった担任が中心になって積極的に進めていく）、どんどん実行に移すといった具合。『遠足』は、お決まりの行事でやらなくてはならないものではなかったから、逆に「今、この子どもたちが必要としていた遠足は何だろうか」とそれまで行くことに何の疑問ももっていなかった『遠足』について考え直し、子どもたちの毎日の遊びをより注意深く見ることになった。そんな中で心に残る遠足は、園から見えるしずはたやま賤機山に年少、年中、年長と三年かけて登るとい

ものである。全員

で一緒に出発する

が、年少児は、ほ

とんど登ることな

く山の入り口にあ

る浅間神社でしいの実を拾って遊び、年中児は頂上

に後一步というところまで登り、年長児は年中児と

逆のルートで尾根伝いにはるばる頂上までやってき

て、降りながら年中児と合流する。ある時は、お別れ

遠足として親子で同じ山を縦断したこともあった。

この場合は、遠くへ行つたことがないから面白い

のではなくて、春夏秋冬いつも園から眺めている一

番よく知っている山だからこそ面白いという「一番

近い遠足」なのであった。おまけに何年もかけてい

ろいろな角度からひとつの山に向かうからこそ年長

になると、この時ばかりは普段の「連れていっても

らう」立場を逆転させることさえできるのである。

この、同じ場所に何度も行くというのは、私にとつ





でも目からうろこの経験であった。

次に小学校に移った時、「生活科」が始まっていた。授業の区切りも「ノーチャイム」になり、いわゆる融通の利かない学校のイメージが少しずつ変わろうとしている時だった。しかし、遠足は窮屈だった。何が窮屈かというと、その度ごとに「今回は、ペアと仲良くなる」「今回は、ペアとお別れをする」「たくさん歩く」といろいろな目的があるからだった。その目的自体は大切なことではあるのだが、私の中にある『遠足』のイメージとは大分違っていた。これでは『遠足』の名前を被った「授業」である（まさにその通りなのだけども）。楽しいことには違いなかったのですが、徐々にそんなものかと納得するようになったが、心に少々の苦味は残った。登校に一時間近くかかる子もいるのに、そこから更に二時間近く歩いて目的地ではんの少し遊ぶ。そして同じ時間をかけて帰る。本当にそれが一年生にふさわしい『遠足』なのだろうか。学年部で相談して

コースを変更した時「自信がつくから、大変でも是非やってほしかった」と昨年の一年生の先生方に残念そうに言われたのを覚えている。先生たちが大変だから止めたと思われたのかもしれない。

私たちの学年部は、『遠足』でできないことを「生活科」という時間を使って楽しんだ。近くの遊水池に春夏秋冬出掛けて行って植物や水生動物、鳥を観察したりしたのは前の幼稚園で経験した「近くの同じ場所に遠足」のバリエーションである。『遠足』という名称にこだわらずに独自に『遠足』を楽しむ、ということを感じたのがこの時代だった。

次に勤めた幼稚園で、まず驚いたのは、ほぼ毎月遠足（名称は園外保育）があるということであった。住宅街にあり人数の割には狭い園だったので、それも理由だったのかもしれない。それにしても、遠足は、たまに行くから楽しいのであって、多すぎるのは、過ぎたるは何とやら……ではないだろうか。しかし、それもほぼ決まっていることであり

(ちゃんとこの時期にはこういう経験をさせたいというねらいがある)、それを変えるのはなかなか大変そうに見えた。とにかく、少しでも本来の遠足の楽しみに近づけたいと、回数を減らしたり目的地を近くにしたりしたのだが、既に形ができてしまっているものを変えていくのは、新しくつくっていくのより難しい。園外保育の計画、日にちの確定、下見に毎月追われていたように思う。他のどこよりも大変な『遠足』の思い出である。

こんなふうに、私の中の『遠足』のイメージは、自分が子どもの頃感じていたものから始めて二転三転してきた。

### 三 子どもから『遠足』を望む

大人がどんな目標を設定しても、その隙間でしっかり遊ぶのが子どもである。先生の中にいろいろな『遠足』についての見解はあろうが、子どもにとって『遠足』は、日常を離れ楽しめるわくわくしたも

のであることには違いない。だからこそ、思いがけないこともよく起こる。

「帰る時間だよ」と声を掛けると、子どもは名残りを惜しんでリュックにめいめいの思い出を詰め始める。木の葉や石などがビニール袋に入ったもの、つかまえた虫などである。その時、A子もそんな気持ちだったに違いない。ただ、思い出がちよっと大きかっただけで……。

「A子ちゃんのリュック、動いてるみたい」の声に担当がのぞいたところ、リュックの中にいたのは何と一羽の鳩。見つかってもA子はケロツとした顔でまた鳩を逃がしていた。他の子もちよつとはびっくりしたが、またすぐ他のことで忘れてしまっていた。子どもの世界では珍しいことではないらしい。

また、これはいわゆる『遠足』ではないが、二年生の子どもたちと生活科でじゅず玉を取りに行った時。予定時間を過ぎても学校に戻れず、この時は最初に書いたのどかな学校ではなかったから、私は内

心穏やかではなかった。次の時間は国語である。戻れないとその分授業が遅れてしまう、これは困った。

「がんばって学校に戻らなくっちゃ」という私に「先生、ここで国語やれば」と言う声。え、どうやって、と思う間も無く「くまのこウーフの朝ごはんは、パンとはちみつと……」と何人かが言い始めた。国語でやっていた「ウーフは何でできているか」という作品の出だしの部分である。それに続けてもっと大勢が暗唱していく。途中自信なく途切れそうになると、いろいろな声が重なり、なんとかつながらって、とうとう最後までいってしまった。最後まで暗唱できた本人たちもびっくり。「やったー」と歓声をあげつつの帰還となったのである。

私は思う。これは、教室の中では起こらなかつたことだ。秋風に吹かれて気持ち良い田舎道を歩いていたからこそ起こり得たことなのだ。一瞬そこがウーフの世界に見えた。

子どもは、日常から離れて『遠足』に出ると、心が

解放され、その魔力が冴え渡る。子どもたちの魔力にかかり、リュックは一瞬にして荷物を運ぶ道具から宝の袋に変わり、田んぼは物語の世界に変わる。

ところが困ったことに、近年この魔力が弱りつつあるように思える。あまりに便利になった生活の中であまり、知らない場所」という感覚が薄れてきた。日常に自家用車で遠くにも行けるため、いろいろな場所が身近になってきた。そのためせっかく魅力的な場所に行っても、「ああ、ここ知ってる」と思いこんでしまう。その途端に、心のシャッターがガラガラと閉まってしまうのだ。いつか、野原のような芝地に遠足に行った時「なあんだ、遊具がないじゃん」と言った子がいた。彼にとつては『遠足』は、移動した場所で遊具で遊ぶことだったのだ。それは間違っているのではないだろう。しかし、幼い頃私がわくわくと待った何か未知のものが待っているかもしれない『遠足』とは少し違うのではあるまいか。遠足の景色も少しずつ変わってきている。(常葉学園短期大学)

# 宿泊保育の取り組みから

山路 純子

## 一 はじめに

日々繰り返される園内の生活から、子どもたちの関心を園外に向け、地域や自然環境に直接触れさせていく機会として「遠足(園外保育)」があります。

近くの公園、施設、田畑などに散歩に出ることで、子どもたちは思いもかけない出会いや発見をし、また地域に生活する人々と様々なかかわりを通して、また地域に生活する人々と様々なかかわりを通して、ながら自分の世界を広げていきます。幼児期に子ども

もたちが環境とかわる体験をしていくことは、その後の生きる力(自分で考え、判断し、行動していく力)に大きな影響を及ぼすと言われています。その意味からも、子どもたちには幅広い多様な体験を重ねていく機会をつくっていくことが望まれます。

子どもたちの生活環境を補完する必要がある時には、園外に出て体験を増やすような努力をし、少し足をのばすことで豊かな環境にも出合えることを認識しておくことが大切です。

また保護者にも協力を得て、地域環境に関する情報を収集するようにし、「散歩マップ」を作成し、所要時間・交通状況・危険箇所等を確認し、いつでも園外保育に活かせるようにしておきます。

子どもたちにとっての遠足(園外保育)は、日々繰り返される生活に、変化や潤いをもたらすものであり、その時期が訪れると行事として同じように繰り返し実施されています。

私たちも、遠足を定例行事として、ある意味では毎年当たり前の行事として捉え、取り組んできたのですが、園舎の新築に伴い、子どもの生活環境が著しく変化したことから、改めて園外保育の大切さを考えさせられ、遠足のあり方の見直しを行いました。以下、その経験を通して生まれた宿泊保育を中心に話を進めていきたいと思います。

一学期の半ばが過ぎようとした頃に、園舎新築の話が飛び込んできました。そのために、子どもたちの生活は大幅な変更を余儀なくされたのです。九月

から翌年の三月までの間、小学校の空き教室に仮住まいをすることになりました。限られた狭い環境の中で生活することになった子どもたちは、思うように遊ぶこともできず、かろうじて校庭の隅と裏の土手が活動の場となりました。この年ばかりは、子どもたちに少しでも豊かな体験をさせるために何とかしなければという強い思いから、まず、秋の遠足(園外保育)を見直すことになりました。特に新園舎での生活ができない年長児のために、思い出とる「宿泊保育」を実施できないものか検討することにしました。未知数の思い切った取り組みでしたが、必要に迫られていたこともあって、保育者の間で意欲的に検討が進められました。

## 二 「宿泊保育」の実施に向けて

例年、春と秋の二回、観光バスで「森林公園」「自然博物館」などに遠足に出掛けていました。事前に入念な下見を行います、行き先に大きな変更



がなければ、ほとんど昨年の実施計画を参考にして進めています。安全性の確保を最優先に、スケジュールはいつのまにか保育者のイメージで組み立てられていたことに、あまり疑問を感じることはありませんでした。

ところが、新たな取り組みについて検討を始めたことから、子どもたちにとってどうであるべきかという原点に立って考えていくなかで、今まで置き忘れていたことに改めて気付かされました。

引越の作業の合間をぬって、夏休みのほとんどを費やして地域の環境と施設などの状況の調査に歩きました。

#### ◇施設の条件

年長児六十四名の子どもたちが、親から離れた場所で安心して宿泊ができるには、まず、安全の条件を満たさなければなりません。その施設は一階と二階が吹き抜けになっていて見通しがよく、また一団体のみを受け入れるという体制なので、無理なく生

活を組み立てるこ

とができる判断  
しました。その他  
の設備も、子ども  
の集団にも扱いや  
すく整っていました。

#### ◇「宿泊保育」の目的

子どもたちの生活を振り返り、その中から宿泊保育につなげていけるものを探っていくことにしました。単なるお楽しみ保育にはしなくなかったからです。

その頃、子どもたちの間ではトトロのことが話題になっていました。「どこに住んでいるのかな」「会いたいね」「遠くに行かなければだめかな」などと、木を見上げながら話をしていました。保育者の方から「トトロに会いに行こうよ」と投げかけ、子どもたちの夢につきあっていくことにしました。

子どもたちと話し合っているうちに、保育者の方



も想像を巡らすと期待感が膨らみ、わくわくし、いろいろなイメージがわいてきました。

◇時期

多くの場合、宿泊保育は夏休みに実施されませんが、年長児の心身の発達から考えると、運動会を終えた涼風の立つ九月下旬～十月初旬が適当であると考えています。運動会を体験すると、子どもたちの体力がめきめきついてきて逞しくなること、また、年長児同士で相談や協力をしながら、自分たちの手で運動会をつくり上げてきた経験が自信となり、心の成長が認められるからです。

しかし、大きな行事が短い期間に続くことになるので、生活の流れを調整しながら位置づけるように配慮する必要があります。

◇子どもたちの実態を捉える

実施するに当たって、子どもたちの心の状態にも十分に注意することになります。宿泊は子どもたちにとっては未知の体験であり、不安感もそれぞれに抱

いているはずです。宿泊保育を通して何を育てていくかを明確にし、保護者への説明も丁寧に行いました。更に必要に応じて個別に話し合う場をもち、対応をしていきました。

アンケートを実施し、計画に反映させて準備をしていきました。

・ お泊まりを一人でしたことがあるか

・ 夜のトイレに、起こしているか

・ 就寝時間、起床時間は

・ 食べ物の好き嫌いはあるか

・ アレルギ―はあるか

・ その他の心配事は など

たとえば、ある母親から「おもしろいかもしれないから、予備のパジャマを用意した方がいいでしょうか」という質問に対して、失敗するかもしれないという暗示を与えてしまうことも考えられるので、傷つかないような対応を具体的に伝えて安心してもらうようにしました。

いろいろな情報をもとに、時間を追って一覧表を作成し、保育者全員で共通理解をして、対応をしていくようにしました。

三・四歳児の保育者も、学級の子どもたちを降園させた後に宿舎に合流し、全員で子どもたちにかかわれるようにしました。

### 三 トトロとの出会い

子どもたちはトトロから届いた手紙を読んで、会えることを楽しみに出掛けました。

宿泊地の周囲の環境は、トトロの住んでいるような森に囲まれ、近くに川も流れています。対岸を走る電車は「ネコバス」のように見え、浮かび上がる民家の灯りはトトロの住みかのように思われます。子どもたちも、次第にトトロの世界に引き込まれていきました。

夕焼けに包まれた山を眺めながら宿舎に入り、かまどに薪をくべてカレーを作りました。夕食を終

え、夜の帳とじりに包まれる頃、「夜の散歩」に子どもたちを誘いました。体を寄せ合って歩きながら、トトロを探し、声を聞き、肩をトントンされたような感覚を体験しました。布団に入ってから、「もしかして来るかもしれないよ」「窓を少し開けておこう」などと言いながら眠りにつきました。

子どもたちの起きた時の様子を思い浮かべながら、夜の見回りの合間に採ってきた大きな葉にトトロからの手紙を書いて準備しました。

……みんなにあいたかったけど、ちよつとはずかしかつたから、まどからのぞいただけで、おこさないでかえったよ。いつまでもともだちだよ。おみやげをもってきたよ。こんど、あそびにいくね……

山の朝は清々しく、友達と一緒に宿泊ができたことは、子どもたちには大きな自信となったようでした。朝食前の散歩で、子どもたちはトトロからの手

紙を見つけ、「やっぱり、来てくれたよ」「トトロは本当にいたんだね」「会いたかったなあ」と言い、甘栗のたくさん入った包みをみんなで開けました。

#### 四 おわりに（保育者が学んだこと）

「園外保育」に宿泊を加えた時、改めて、子どもたちの心身の発達をどのように受け止めていくか、子どもたちとその時をどのように共有していくかを深く考える機会をもつことができました。

なによりも保育者自身が、活動を創り出していくことに新鮮な喜びを感じ、今まで忘れがちな感覚が戻ってきたように感じました。

その後、宿泊保育のトトロは次の年の子どもたちの心に引き継がれて、少しずつ見直されながら十年の年月が経過してきています。

ところが、あれほどにどきどきし、わくわくした感覚が薄れ、いつしか計画ありきで、同じようなやり方でいともスムーズに実施するようになってい

ことに再び気付かされたのです。期日やメンバーを入れ替えただけの計画表を作成し、「昨年もやったことだから……」と惰性で実施していることに、なら疑問を感じなくなっていたのです。保育者には新たな体験を創り出すとする意欲や感動が薄れてしまっていたことを反省しました。

園外保育の多くは、園の行事に定着し、「なぜ」「どのように」という根本的な見直しを図りにくいものです。それは、季節や乗り物の手配、他の行事との調整などからのしぼりを強く受けていることが理由のひとつです。

たまたま園舎新築によって生活環境が大幅に制約されたことから、遠足のあり方について子ども側から全面的に検討する場をもつことになり、惰性に甘んじてしまうことなく、子どもと共に創り出していく（わくわく、どきどき感のある）ものとして、見直しを図っていくことの大切さを再確認いたしました。

（常磐短期大学）

# 広い空の下で

目羅 愛

はじめに

私たちの学校には、学校行事というものがほとんどありません。毎年きちんと行う行事といえば、入学式、卒業式、クリスマス会の三つだけです。運動会もお遊戯会も、ありません。前回運動会を行った

のは二、三年前になりますが、それは保護者の方からの提案でした。在籍している一人の子どもが自分の兄弟の運動会を見て、自分も運動会してみたいとお母さんに言ったそうです。その子の気持ちにこたえたいと思い、運動会を行うことにしました。ホール（学校の中心の場所）に簡単な飾りつけをして、



どの子どもも楽しんで参加できるような競技——玉入れ、パン食い競争、つなひき——を準備し、当日「今日は運動会しよう！」と子どもたちを誘って行いました。地味で簡単な運動会ですが、いつもの学校の雰囲気を大きく変えなかったためか、子どもたちは緊張することなく楽しむことができました。

子どもたちのためにイベント的なものを企画する時、私たちが何よりも大切にしたいと思っている点は、一人ひとりの子どもの学校生活そのものです。毎日の子どもの生活があつてこそ、行事のようなちよつと特別な時間が活きてくるような気がします。学校生活に溶け込んでいるような学校行事のあり方が、理想だと思っています。

これから述べる「遠足」も、当然毎年「必ず」行うというわけではありません。遠足はクラスごとに

企画することが多く、クラスの担任が子どもたちの様子に応じて遠足をするかしないか判断しますが、たいていの場合どのクラスも遠足を行っています。

遠足を企画する時、一人ひとりの子どもの顔を思い浮かべながら、どの子どもも楽しめるように時期、場所、交通手段、昼食などを担任同士で相談します。「電車やバスに興味をもっている子がいるから公共の乗り物を使おうか」「いや、水が好きな子がいるから船に乗ってみるのはいかがか」「レストラが騒がしかったりすると食べなくなってしまう子がいるから外食ではなくお弁当に」というように、一日の流れを頭で描きながら、一つひとつつくっていきます。いつもとは違った空間の中での子どもたち。どんな様子になるのか、想像できても実際はわかりません。ただ、特別な活動だからといってすべてを特別にするのではなく、一緒に過ごす人や食べ

るもの、その子どものやりたい遊びなど、いつもと変わりなくできることも実現できるように考慮します。特に、年齢の小さい子どもほどそういう考慮をする必要があると思います。

昨年度一・二年生のクラスで夏と秋に行った、二つの遠足の実際の様子についてふれていきます。

### 七月の遠足：水族館

この一・二年生クラスは新入生を迎えてスタートを切ったクラスです。普段の学校での生活は個々の遊びをしているので、みんなで一緒に何かをするとはあまりありません。新学期が始まって一か月が過ぎた頃から、子ども同士が少しずつ互いに意識を向ける様子がうかがえるようになってきました。ほんやりと輪郭をもち始めようとしているクラスの輪。「みんなと一緒になかをした」というより

も、「みんなと一緒にいた」と思えるような機会をつくりたいと思いました。遠足は絶好のチャンスでした。

前年度の遠足に参加した子どもたちにとって、今回は初めてお母さんと離れての遠足になります。行き先は東京都品川区にある水族館、区営の大きな公園の中にあり、その敷地はとても広いです。そのため子どもたちが自分の居心地の良い場所を求めて、点々ばらばらに散ってしまうのではないかと懸念しました。しかしそれと同時に、それぞれの子どもにとって楽しいことが見つけれそうな期待をもてま



した。

当日体調を崩して欠席した子どもが多かったので、クラスの半分の人数（四人）での遠足になりました。駅からバスに乗って水族館に到着、イルカショーを目指します。しかし、水族館の照明の暗さで不安になった子の中へは入らず、外のベンチでお弁当を食べることを選びました。中に入ったのは三人、イルカショーを見たのはそのうちの一人だけ。

一人の子は水族館の中を通過しただけで（魚をほとんど見ずに）外へ出て、外のベンチにいる子と一緒に弁当を食べました。もう一人の子は建物の構造やエレベーターに興味をもっているので、水中トンネルをくぐったり建物の中（水族館は二階建て）を探索しました。

そのあとの時間は、水族館を含む公園の敷地の中で、一人ひとりがそれぞれの好きな場所、好きな遊

びを見つけて、思い切り楽しみました。大きな岩場で次々と岩に挑んで頂上を制覇していった子。水族館の反対側には、アスレチックのある小さな遊び場があり、そこまで足を伸ばして遊んだ子。水族館を満喫した後売店でジュースを買ってゆっくり過ごした子。施設内の探検を終えた子は、近くの信号機を調べに敷地の外へ出かけました。

子どもたち一人ひとりが、いつもと違う場所でも臆することなく、自分らしく遊ぶことができて本当に良かったと思いました。また、広い敷地内で遠くのほうにクラスの仲間を見つけた時に、とても嬉しそうに「おーい」と呼びかけたり、それに応じて「おーい」と呼び返してくれて、二人の間で呼び合う遊びが生まれたりしました。子どもたちの心の中に、一人ではなく仲間と一緒に来ていることがはっきりと意識されていることがわかる場面でした。

## 十一月の遠足：お台場でバーベキュー

夏休みを終えて二学期になってから、学校生活の中で、大人を介さず子どもたちだけで遊ぶ場面が増えたり、他の子どもの遊びを自分の遊びに取り入れてみるなど、クラスのつながりが強くなっていると感じました。私たちの学校は保護者による送迎なので、保護者同士で話をする機会がたくさんあります。土曜日は授業があるので、お父さんも一緒に学校に来て子どもたちとかかわっていています。担任と子ども、担任と保護者、親と子の関係から、子ども同士、保護者同士、そこに大学などの専門機関から実習に来ている学生も加わり、それぞれの人間関係が広がり始めていました。秋の遠足は、クラスを支えている人たちみんなが参加できて楽しめる遠足にしたいと思い、親子で参加するバーベキュー遠足にしました。もちろん、実習生も。

海に面した横長の公園で、噴水や遊具、いくつもお台場があったりして、またもや広い所です。しかし、子ども同士のつながりが深くなりつつあるというのと、夏の遠足でそれぞれの場所で楽しめた経験があったので、たとえ離れ離れに過ごしたとしても楽しい経験になると信じてことができました。

バーベキュー自体子どもたちはあまり食べませんでした。お父さんやお母さんが楽しそうに過ごしている様子が嬉しくて、遊びに出かけてはバーベキューの所まで戻ってくる子がほとんどでした。お料理が大好きな子のために料理の器具を用意して、その子は丁寧に粉をまぜてチヂミを作ってくれました。

今回の子どもたちの過ごし方は、前回とは異なります、それぞれの好きな場所へ行き好きな遊びをしますが、次第に人のいる場所へ移動して遊んでいました。広場で「はないちもんめ」や「かくれん

「ぼ」をして遊んだり、大好きな実習生と海岸線を散歩したり、友達がいる所を探すことそのものが遊びになっていたり、人とかかわりながら過ごすことを選んでいたように思います。そして、気がついた時にはクラスの仲間が同じ遊具で遊んでいて、たくさん遊んだ後に広場でみんなでアイスクリームを食べました。なんて、幸せな味だったことか！ 遠足から数日後、学校で「バーベキューしたい」という子どもからの提案で、ホットプレートを使って焼きそばを作りました。

子どもたちはお互いに、より強く深く、つながり合っているのだと感じさせられた遠足でした。子どもたちの中に「ともだち」としての意識が、遠足によってよりはっきりと手応えとして感じられたのではないかと思います。また子どもを中心に、子どもたちを支えている大人たちも互いのつながりを発見できたと思います。

### おわりに

毎日の生活の中でそれぞれの子どもの好きな遊びや場所は多様なことから、遠足に限ってみんなで一緒に何かをさせようとするのは不自然なことなだと気づきました。それができるのは、子どもの中から「友だちと一緒に遊びたい」という気持ちが起こって初めて成立するのだと思います。また、水族館やバーベキューに来たものの、子どもたちはそれよりもそれらを取り巻く所で各自の楽しみを見つけていました。水族館やバーベキューが目的ではないから、それで良かったと思います。遠足という特別な考えてしまいがちですが、昨年度の遠足を通じて、意外にも学校生活の延長線上にあるのだと思いました。毎日共に生活をしていくうちに芽生えてきた、子どもたちのつながり合いを改めて感じることができました。

(愛育養護学校)

十一月二日

千葉「加曾利貝塚博物館」遠足日記

鈴木 眞廣

はじめに

現代は子どもの主体性や社会性が育ちにくい社会だといわれます。このような時代に生きる子どもたちなので、保育園では子どもたちの主体性の出番をできるだけ用意し、子どもたちと共に創り出す生活や遊びを心がけています。

さて、遠足ですが、「どんなことを知りたい・調べたい？」と、子どもたちの興味・関心事の中から、決まる毎年の遠足です。これまでに先輩たちが調べたものは、へ恐竜の種類や生態・実際の大きさへ雲って何？ 雨のしくみ、虹のできるわけへ（園で飼育している）ガチョウに耳はあるのか？ などなど。知りたいことを話し合い、調整し

て行き先を決め、出かける遠足の園外保育ですが、ここでは昨年秋の遠足を紹介します。

真夏の日向に出ていたフライパンが火傷する程熱くなったことから、畑のナスを焼いてみたけれど見事に失敗。そんなことから、「昔の人は、どうやって火を熾おこしたんだろう」と知りたくなった年長の『でんき組』。火熾し体験ができるところとして二か所が候補に挙がったけれど、どちらも小学校の五年生以上のこと。電話ではらちがあかないと判断して、下見交渉に出かけた担任でした。

### 加曾利貝塚博物館に決定

#### そしていよいよ出発

必死に交渉することで、こちらの想いが伝わったんですね。加曾利貝塚博物館が、受け入れてくれることになりました。

8時41分 大貫駅出発 Mちゃんは一週間前から、七時に起きて練習したとか。地図係(?)のKちゃん、電車の中で、駅名を書いた紙を出し、「次は五井だから、あと一・二・三……六だ」とまわりの子に教える。

9時41分 千葉駅到着。たくさんの人たちにもまれつつも、全員無事に降り、点呼係がホームで人数を数える(練習時はうまく数えられていたMちゃん。駅のホームでは、「一・二……十七」と数えても、不安なのか、担任に何人? と確かめる。思わず笑う担任)。

10時8分 モノレール千葉駅にて、一人ひとりに切符が渡され、自動改札機に。握り締めた切符が改札にひっかかってしまうドキドキもあつたけれど、無事ホームへ。どこかの幼稚園の子どもたちが乗り合わせ、「一緒かねー」と思ったら、千葉動物公園で降りていきました。

10時28分 桜木駅到着。駅を降りると、向こうに茶

色の不思議な服を着た人。ガイドポランティアのおばちゃんが迎えに来てくれたのでした。

ガイド係(U君の、「道を案内する、そういうのガイドって言うんだよ」の助言で決まった子どもたちの係の名前)のR君、K君がメーカーで印をつけておいた桜木駅から加曾利貝塚までの道のりを、「まだ一つの角は曲がらない」「次の角は曲がるんだ」などの指示に、ポランティアのおばちゃんも「へえー、一年生よりすごいねえー」と感心するほど。

10時50分 加曾利貝塚博物館に到着。四人のポランティアと、いつも電話で応対してくれたうわさの「横田さん」に出会う。ここから加曾利貝塚と縄文時代の二つのグループに分かれて行動。ポランティアの人たちは、このグループの名前が素敵と感動。胸元の貝(グループの目印として、地元の海岸から拾ってきた貝をブローチやネックレスに作って着けて行った)を見て、またまた感動!

加曾利貝塚グループは、まずは竪穴式住居群跡

へ。「ここは昔の人が住んでいたお家の跡なんだよ」かびくさい部屋のガラス越しの沢山の穴ほこの説明に、一所懸命ノートに文字で書く子、絵で描く子と、みんな真剣。写真係のN君も、バシバシ撮る。貝層断面観覧施設に入ると、「おっー! すげー、貝殻だよ」と興奮気味の子どもたち。ポランティア「昔の人たちが食べていた貝の殻を捨てたところが埋まったものなんだよ」「今から五千年前の貝殻なんだよ」という説明に、へずつと前の貝殻とノートに書くなど、子どもたちにも、歴史の深さが不思議と伝わったようす。

竪穴式住居 生い茂った草むらを「元氣いい子は走れー!!」と言われて走り出すと、見えてきたのは復元された竪穴式住居群。縄文時代はまだワラがない。そこで屋根は、萱や葦、ガマで葺いた。「今はポロポロで中には入れないんだよ」と言われて、「はいりたかったなあ」とN。「じゃあ、屋根を葺いてないけど骨組みのお家の中に特別に」と、入れ



でもらった。博物館 いろいろな縄で模様を付けたいろいろな形の土器を見る。「縄で模様を付けるなんて昔の人は頭いいな」動物の剥製を見て、「すごい！」と子どもたち。ボランティア「これは、昔の人たちが食べていた動物」「石を割ったり、削ったりして作ったヤリや弓矢で、獲物を捕ったり、落とし穴を作って、イノシシを獲ったりしていたんだよ」。

縄文時代グループは、竪穴式住居跡を見て、ボランティア「このお家に何人暮らしていたでしょう？」子「十人」「一人」「五人」ボランティア「昔の人はこの一つのお家に五人くらいで暮らしていました」子「うちも五人かぞくだあ」。

貝層断面観覧施設を見て。「うわあー、トンネルみたい」と暗い施設内に入る。ボランティア「赤いまるがついているところには、大きい土器のかげらやイノシシの骨が埋まっていますよ」。子：赤い印を探し真剣に見る。カメラ係のM。絵に描かれた昔の人

の生活をすべて激写。できあがりの写真もばっちり。博物館内。ちよつと、時間が少なくなつたけれど、剥製や貝殻など、子どもたちはそれぞれ興味のある所でノートをひろげメモをとる。ここまであまりノートを開くことのなかったT君。イノシシの骨を見て、ノートを開き、スケッチに専念。「終わつたあ」と、「ふーっ」と大満足。

12時 お昼タイム。広場でお弁当。留守番のお友達、ちゃんと当番やったかな？ と保育園への気遣いも。

13時 いよいよ火熾し体験。博物館の人も加わり、八グループに分かれて火熾しを体験。最初はボランティアがお手本を見せてくれる。弓に張つたつるを火種になる棒に絡めて、棒をしばし回転させると、煙が立ち昇ってきた。炭化した木の粉が、火種を受けるつばきの葉の上に貯まっていくな。「もう少し」「もうちよつと貯めて！」こぼれた火種からも一筋の煙。「そろそろいいかな」と貯まった火種の

粉を、用意した麻の繊維の上にそっと乗せて包み込む。それを、今度は手にもつてくるくる回すと、麻から煙がもくもくと出始めて、突然ポツと火がついた。「うわー！」と子どもたちも大歓声。自分たちもとやってみる。弓を二人で引つ張り合うのも楽しかったようで、慣れてくると息も合って、うまいもの。ボランティアも「いいぞ」「いいぞ」と子どもたちを盛り上げてくれる。なかなか火が熾きなかったM君も、三度目の正直で火が点いて、ボランティアの男の人が「よくやったぞ」と差し出してくれた右手と無言の握手。

最後に聞きたいことは？

T「なんで昔の人は、ウサギとか食べてたんですか？」

ボランティア「昔はねえ、今みたいに食べ物があったから、動物とか食べられそうなものを見つけ食べてたんだよ」（食べ物のことは子どもたちにとっても身近。でも「獲物を獲って食べる」という



▲火焼し体験 つるを張った弓を持つ手に力がある

ことが、衝撃的だったようす)。

M「なんで昔の人は、火熾すの、手でやらないで、弓みたいのでやったんですか?」

ボランティヤ「手でこすりあわせるだけでは、手が真つ赤になって、皮がむけるくらいやつてもなかなか火が点かないので、道具を使って火を熾すことを考えたんだよ。昔の人は頭がいいねえ」

14時 お別れ。一日案内してくれたガイドボランティヤのみなさんに、ありがとうの挨拶。桜木駅へ。

15時28分 J R千葉駅団体改札口の駅員では和光の卒園児で、「おーっ」とみんなに手を振ってくれらる。「和光で見たことあるお兄ちゃんだ」と子どもたちも大喜び。電車の中では興奮さめやらず、おしゃべりに花が咲く。もちろん一日の疲れでぐっすり眠る子も。

16時27分 大貫駅着 お家の人たちの「おかえり」の温かいお迎えに、子どもたちもホッとした表情が印象的。

子どもたちが聞いて覚えて、

教えてくれたこと

○昔の人はシカとかイノシシとか、ウサギとか、獲って食べてたんだよ。でもね、犬は獲物を獲るのに活躍するから、食べないで大事にしていたんだよ。


○昔の男の人はキバを腰に飾っていて、そういうのを飾っていた人は強いってことなんだよ。それで女の人は、おしゃれで貝殻とかを付けていたんだよ。

○赤ちゃんが死ぬとねー、おっきな土器に入れて埋めたんだよ。

○ノートに書いてあった「ふんせき」というのを見て、大人が「ふんせきってなあに?」と聞くと、「ふんせきってねー、犬か人間の糞がたくなったもの」と教えてくれる。

○「つりはねー、昔の人はあんまり深いところは行かなかったんだよ」(縄文時代の人は、わりと用心深かったよう)。

子どもたちのノートより

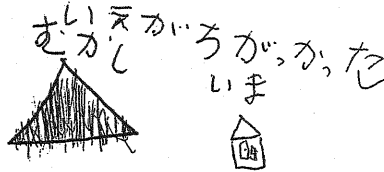
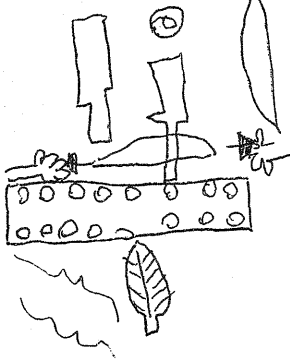
K  ふんせき

H すごいところ ①地面がす

ごかった。②冷蔵庫がすごい

(貯蔵するところ)

「ひふいこしたよひふいこし  
のやりかた」だよ



なまえ よこたさん

A きさも はまぐり みなみかいづか しかのは

むかしのおうち どんき(土器) おどんぶり

みみかぜり ふんせき せきぼつ

N あくせさり おとこのひとはこしにきばをつけ

ていた。つよい

W いえ ほして またつくりなおした

A むかしのおうち かや すすき

十二月一日の報告会に、本物の竪穴式住居を作つて欲しいと頼まれた園長も、必死で取り組みましたが、強力な親父たちの助っ人も入って、間に合つてよかつた、よかつた。その後、野焼き同好会の人たちが園にきて、土器の製作と野焼きの指導をしてくれたり、卒園式にはお父さんとお母さんが、記念にと「まがたま」のネックレスを保育園の窯で焼いてプレゼントまでしてくれた遠足でした。

(千葉県富津市 和光保育園 園長)

# 女性の心と体に忍び寄る危険 (1)

## — 思春期から成年へ —

〈お茶の水女子大学公開講座「子育てのためのリスク管理論」から〉

大森 美香

### 健康心理学とは

私は、大学で主に臨床心理学、それから健康心理学といった科目を担当しています。臨床心理学は、最近、臨床心理士といった言葉が割とポピュラーになってきていますので、聞いたことも多いと思いますが、健康心理学というのは、世の中での認知度がそれほど高くないと思

います。そこで、今日の私の話とかかわることになります。ですので、少しだけ健康心理学について説明いたします。臨床心理学はどちらかというと、心理的な不適応とか、何か悩みがある人に面接をして対応をしていく、それを科学的に説明していくということかと、想像されていると思います。しかし、健康心理学というのは私たちの心身がより健康であるためには、どういう行動を促して

いったらよいか、あるいは体の健康と心の健康といったものがどのように関連しているのかといったようなことを研究していく領域です。どちらかというところ、臨床心理学が医学モデル、どこか何か悪いところがあるからそこを治すというようなモデルに即しているのに対して、健康心理学というのは、私たちが「よりよくあるために」、つまり「Well-being」を志向しています。その点で、体の健康と、心理的な健康の両面から考えていかなといけない。体の健康と心の健康が両輪となって噛み合っているって、私たちの自己実現や、「よりよくある」といったことが実現されるわけです。そういった研究をしています。

今回の公開講座の全体の趣旨は「子育てのリスク管理」、私に与えられた題目は「女性の心と体に忍び寄る危険」です。副題に「思春期から成年へ」とありますが、今回はむしろ「成年」のほうに焦点を当てて話したいと思います。

## 乳がんの問題

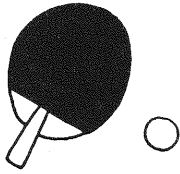
今日は、「ライフサイクルと心身の健康」として、まず、体の健康の問題として「乳がん」の問題、次に、女性の鬱を取り上げていきたいと思えます。

まず乳がんについてですが、一九七五年から二〇〇〇年にかけてのわが国の年齢調整がん罹患率を見ると、全体的に一九八〇年代くらいからは横ばいですが、胃がんは少しずつ下がっています。私たち女性に非常にかかわりのある乳がん・卵巣がんの罹患率は、微妙に増加してきています。公衆衛生上の説明としては、食習慣の欧米化が関連しているとされ、われわれにとっては日常の問題として捉える必要があるといえます。

リスクファクター（危険因子）として、①が四〇歳以上の女性であること ②未婚（三〇歳以上）であること ③既婚・未婚を問わず初産年齢が三〇歳以上であること ④閉経年齢が五十五歳以上であること ⑤肥満であること ⑥良性の乳腺疾患になったことがあること ⑦乳が

んになったことがあること ⑧乳がんの家族歴があること（特に母・姉妹）というものがありません。リスクファクターとは、このような要因があると罹患する確率が高くなるという指標です。当てはまらないからといって、乳がんにならないという保障があるということではありません。逆に、当てはまるからといって、必ずかかるということではないわけです。統計的にみて、こうした要因があると罹患する確率が高くなる、ということですよ。

病気というのは、いろいろな観点から捉えることができます。まず「疾病」というのは、乳がんを医学的にみた場合の呼び名ですが、「疾病」と「病」と分ける時、それぞれ違った捉え方があるといえます。「疾病」としての乳がんは、「腫瘍がありますよ。あなたは乳がんですよ。これはそのまま放置しておく他に転移して危ない状況になりますよ。だからとりましよう」という、いわゆる医学的なモデルということになります。では、切ればそれでいいかという



と、そういう問題ではない。そこで出てくるのが、「病」としての乳がんです。心理学的には、自分が自分である感覚を「自己概念」と呼んでいて、「自己」がさまざまな側面から成り立っているとされています。ひと言で「自分」といっても仕事をしている自分、母親といった役割としての自分、そして今私がこういう体であるという身体的な自己、という側面をもっているわけです。乳がんの治療で胸を切るといふことは、そこからある一部がそぎ落とされることになり、ある意味をもつてくる。乳房切除をすることによって付随してくるもの、ひとつは体型が変化するということです。実際には、夫との関係に對する不安、温泉とかプールなどへ行くことのためらい、ためらうことによる行動の制約などがあります。あるいは、子どもがまだ乳幼児の場合、お母さんのおっぱいを触りたいということもあるでしょう。そうしたときにどういふふうに対応するのかといったような困惑が生じる。「疾病」として乳がんを捉えて、「じゃあ切りましよう」とすることは、ある観点からすると簡単なことなの

ですが、実際それに付随してくる心理的な状況を考える  
と非常にいろいろな意味が生じてくるといえます。

### 乳がんの予防・早期発見

健康心理学が追求しようとしていることは、心身ともに完全に良好な状態、Well-beingです。ひと言で言うことは簡単ですが、まったく健康な状態というのは、ありえない。完全に良好な、人間ドックの結果の数値が全部完璧ですという状態はあるかもしれないけれど、だからといって、心理的に完全に良好かというところではない。なるべく疾病が起こらない状態、あるいは、あつたとしてもなるべく早い段階で治療ができるためにはどうしたらいいのかということを考えていくと、予防や早期発見にかかわる行動を促すということが必要になってきます。

乳がん発見のためのマンモグラフィという検査があります。乳がんへの健康心理学的なアプローチについて、大学の二、三年生に授業で説明したところ、それに対し

て次のようなコメントがありました。「乳がんについて何も知りませんでした」「女性に特有のがんは他のがんに比べてあまり切羽詰った感じがしなかった。しかし、今日の説明を聞くと、乳がんのリスクファクターは自分の心がけではどうにもならないことが多いようだ」「乳がんを身近に感じたことはありませんでした。ピンクリボンキャンペーンも知りませんでした。自分ががんなどの大きな病気になるわけがないと心のどこかで思っています」。

ピンクリボンキャンペーンというのは、エイボン（AVON）などがお金を出して推進している乳がんの予防キャンペーンです。大学生たちが、乳がんについて案外知らないことが明らかになりました。一方、「知ったからといって、コストの問題や検診の方法を考えると、実際に検診に行くかどうかは、微妙だと思えます」というコメントもあります。ある程度知識として啓蒙することはできるけれども、実際にアクションを起こせるかということとは、まったく別問題。もちろん、大学生は二〇



歳前後なので、確かに自分の年齢ではまだまだと思っ  
ています。また、実際に健康にいいといわれる行動を起  
すかどうかというのは、その人のパーソナリティーにも  
かわってくるし、その環境から受ける「このことが自  
分にとって脅威となる」というメッセージの受け方に  
よっても違ってきます。

二〇〇年度のがん検診の受診者数では、自治体の検  
診で、子宮頸部がん、それから子宮体部がんの検診が進  
められているので、結構このあたりの検診の受診率は高  
いのですが、乳がんかつマンモグラフィを併用した検診  
の受検者は、比較的低いことがわかります。今は、やは  
りマンモグラフィを併用した検診が早期発見に非常に重  
要であるということがいわれているので、その受検率を  
上げていかなければならない。すなわち個人も検診行動  
を高めることが、健康心理学の課題ということになって  
います。

また、外来で発見される乳がんの腫瘍径の平均値はな  
んと戦後からほとんど変化しない。もし、啓蒙活動が進ん

で、あるいは検診のシステムが発展してきて、なるべく  
早期発見ということが進んできているのであれば、外来  
で発見される腫瘍の大きさは、戦後からもっと小さく  
なってきたはずですよ。ところが、変わってきていな  
い。つまり、早期発見がそれほど進んでいないのです。  
皆さん個人として、自分の体のリスクを回避するとい  
う意味からも個人的に検診に行く必要があるし、同時に社  
会的なシステムとしてそうした検診が促される必要があ  
るのではないかと思います。このあたりまでが、体のリ  
スクの回避といったところです。ちなみにナショナル・  
マンモグラフィ・デイ、ピンクリボンキャンペーンも輸  
入されてきたもので、欧米などでもこうした活動が進ん  
で、乳がんによる死亡率が一九九〇年ごろから低下して  
いるということもありますので、やはり社会的なレベル  
での活動というのにも必要ではないかと思えます。

〈続く〉

（お茶の水女子大学）  
（講演） 平成十八年二月九日

# 流れるイメージと、流れをつくるテーマ

津守 眞

## 子どもの遊びの中にあるテーマに気が付く

朝、四歳のその子は私の家に飛び込んで来るなり、幼稚園で飼っているカエルのことを話し、庭に池をつくり、カエルのお城をつくると言った。私はこの子と池を掘るのにはどうしたらいいかと考えているうちに、今度は温泉をつくると言い、風呂場のお湯をホースで玄関の方に出すと言う。以前にそうすることがあった。私は玄

関が水浸しになる覚悟をするうちに、その子は勝手口に束ねてあった余分のホースが風呂場の水道の蛇口につながらないかと考え、ホースとホースをつなぎ合わせようとした。どれもうまくつながらない。私はその子と一緒に苦心するうちにホースに鋏で切れ目を入れたらホース同士がつながった。更にそれを玄関の排水口の穴に突っ込み風呂場の水が玄関の外にまで出た。箕子すかこを敷くと、玄関前がビーチのようになる。その子がそこに小さ

な魚模型や貝殻も置いたら、海岸のようになった。

幼児の遊びは外見は多様であるが、よく見るとそれぞれの子どもに繰り返し現れるテーマがあることに気が付く。この場合も次第にわかったのは、ホースをつなぎ合わせることで水を流すことがこの遊びのテーマになっていることだった。私はそれに応えていけばいい。気が付いたら十二時になっていた。二時間半かけたことになる。カエルのお城や温泉は忘れたかのように熱心に遊びつづけた。

「流れをつくる」ことと、「つなげる」こととは、この子のごく小さい時から繰り返した遊びのテーマであるが、その最初はいつごろからだったろうか。

### そのはじまり

ジッと見ていて関心のあるものに手を出すようになった後のことである。一歳一か月の時、トイレの水の流れる音がしたら、この音は何だというように、その子は居間からトイレにサッと歩いて行った。三週間後、その子

は私の腕をかかえて台所に行つて、「ダ(抱っこ)」と言つて流しの上に行つた。音のするところに連れていけと、要求が高度になった。水の流れに手を入れられるように抱くと、背が高くなり、今まで見えなかったものが見える。しばらく水の流れで遊ぶと快く次に移る。

つなげることの最初は、一歳四か月の時である。ババちゃん(祖母)に新聞折込チラシの自動車を切り抜かせ、「ダ」と言つてセロハンテープを出してほしがった。自動車をセロハンテープでつなげさせた。ババちゃんと体を寄せあつて、切り抜いてもらう親しみを味わつていくようだった。

### ◇一歳七か月

昼食後、台所の流しで水を出し、雑巾や手ぬぐいを振り回して、床を水でびしゃびしゃにし、喜んでウワーと声を上げた。大胆に水をまいた。私が濡れていいように準備をして、思いきつて相手をした。三十分くらいも水で遊ぶと自分でやめて椅子をおりた。着替えさせてもら

い、それですっかり終わった。そのあと、ひとりで部屋を何度も行ったり来たりして、籐椅子の下に猫の縫いぐるみや電車を突っ込んだり、あちら側からのぞいたり、こちらから見たりしていた。ひとりで遊んでいるというのは、ひとつのものを多方面から見るといふ高度なことなのだ。

#### ◇一歳九か月

台所の流しで水遊びを始めた。私が脇についていた。風呂場に行こうかと言ったら、最初、風呂に入れないと母親のかと思つてためらつた。風呂に入るのではないと母親が説明したら、すぐに自分から風呂場に行つた。私が空の風呂桶に入り、その子が水栓の操作をし、強くしたり弱くしたり、ジーツと見ながら注意深く操作する。機械部の蓋を開け、蛇口を機械部に向けたので、そこは機械だから水を入れるんじゃないよと言つたら、じきに蓋を閉めて自分から外に出て、「オワリ」と言う。止められたと思つたらしい。子どもは大人に対して敏感である。

#### ◇二歳

二歳になつたその子は、玄関前で、大人にじょうろで水を流させて、水の流れを見る。途中でしばしば黙つてジツとしている。一人で考えたり、想つたりしているのだろうか。そういうとき私はあまり近寄らない。子どもが自分で始めたことは、きつと次の思いがけない良い展開がある。

ババちゃんと紙粘土で亀を作つたらしつぽがとれた。それをつけさせて、自動車の上に乗せてみたり、椅子の上から見たりしている。しつぽがどこにつながるかを考へていたのかもしれない。傍らにいた私は、人間にも昔はしつぽがあつたことを考えた。記憶にもないほど遠い過去から引きずっている。生まれてから二年しか経たない幼児にはその頃の記憶があるのかもしれない。

昔だつたら田んぼの畦道や小川の流れが自然とともに身近にあつた。いまは水道の蛇口は大人の背の高さだから、大人が抱きかかえないと届かない。一歳を過ぎた頃から子どもの水への興味に親は困らされるが、水への関

心はとどめることはできない。私の学校ではいつの時期にもだれかがホースから水を出して遊んでいた。いままもそうである。だれかが水の流れに夢中になっている。それを可能にする環境をつくることは教育の課題である。

### 流れるイメージと、流すテーマと

流れるという自動詞と、流すという他動詞とは密接に関連している。流れる水の触運動覚はイメージを生み、次には自分の手で流れるイメージを実現しようとする。それは人生の早い時期に始まる活動のテーマである。流れるという語は水だけではなく、電線を電気が流れるなごど比喩的に用いられる。子どもは電車で遊んでいても、何台もつなげて、流れるように長くしたい。つなぎ目がうまくいかなないと、つながるように工夫する。自分で作った牛乳パックの電車をガムテープで貼り合わせようと試みる。糸をつないでケーブルカーの通りをよくする。筒の中に水を入れて水が通るようにする。遊びの材料が何であろうと、流れるイメージは共通であって、流

れが阻害されるのは気持ちが悪くない。

水はどこから来てどこへ行くのか。リチャード・スカリーの絵本、『What People do All Day』、「おとなの一日」は、その子が好んだ絵本のひとつだった。大工さんが水道管を二階の浴室にまで通し、電線が電柱から洗濯機やオープンにまで張り巡らされる。その水道の水はダムから各家庭にまで送られる。汚水は別の管を通して排水溝に集められる。幼児の関心にびつたりだった。私がスカリーの本を持つてくると、その子は私に寄りかかって聞いた。

私の家の本棚の古い保育絵本の『キンダーブック』には水の流れのテーマが何冊もある。葦の沼は、幾年も経つうちに水が涸れて小さくなり、木が切り倒されて団地の公園の小さな池に残るだけの話（村上勉え、三越左千夫ぶん）は、何回



も読まされた。

## 水遊びはじつじく

二歳を過ぎたその子は、水遊びをやると言って、裸足で石の上を歩いてホースを長くして玄関前に水をまいた。水が流れることが大事だった。水たまりに、木の葉を浮かべて遊んだ。土の穴に水がたまるのをジツと見ると気になったが、自分が濡れないようにホースを手を持っていった。じきに濡れても平気になるが、穴に水がたまり、穴から外に水が流れると、乾いた土に水が染み込むのをじつと見る。この水はどこからくるかと尋ねるの、私は水道の栓にホースをつないで、水はホースの中を流れて、穴の中に出てくることをゆつくり説明すると、ジツと聞いている。「流れる」ところに関心がある。バちゃんに来て、寒いから家の中に入ろうと言うと、「イカナイ」と言った。子どもが先に立って歩き回るの、私も寒さを感じなかった。私は、「今日のおやつは

何かな」と言うと、ジツと聞いていて、じきに部屋に入った。リンゴの煮たものだった。一時間半も水で遊んだのにそんなに長い時間が経ったとは思えなかった。それほどその子は充実していたし、私も面白く過ごした。

## どこからどこへ

しばらくしたら、「イスカラ イスへ」と言うので、椅子と椅子の間に板を渡し、細長い箱を二つつないで鉄橋にした。新幹線がその上を通るようにするのに苦労した。それを見ていたが、突然「ボク、ウマイカラ」と言って、積み木をつなげて新幹線が通る線路をつくった。朝からこうしてつきあっていると、自信をもち興味をもって遊ぶ子どもは、自分から次に見つけよう。

夕方、私のワンピースを見て、コードをコンセントにつなげたがった。私は積み木を長く並べて、別の部屋に行くように誘導した。さっきのレールにした椅子と板にまたつなげたら、金色の玉を持ってきてぶら下げると言う

ので、ガムテープと、紐とセロハンテープを使って椅子にぶら下げた。そうしたら、急にままごとセットを持ってきて遊び始めた。新幹線を手で動かし、障子の敷居のレールの上を、だまって、あちらからこちらへと、邪魔なものをのけて、ガラス戸を動かしながら、新幹線を走らせた。コンクリートミキサ車がこわれていた。そこを指して、「ココカラ ジャーッと コンクリートガデル」と言う。そうしたら断然精彩を放ち、自分だけで熱心に遊び始めた。自分で始めたことはかくも違うものかと思わされた。

### 子どもは人類の父

私が以前にお茶の水女子大学で、自然科学の専門の方々と共に行った共同研究がある（文部省科学研究費特定研究 一九九七）。その中で共同研究者のひとりである私の畏友、山柘雅信氏の「幼児の自然観における流体力学」は、次のように述べておられる。「今日自然科学は途方もなく進歩したが、自然は荒らされ、人の心は空

虚となってしまった。そして、科学技術を志す若人には、自分の学問と仕事のよりどころを求める願いの切なる見るのである。このときもう一度幼児の心を知りたい。創造物に対する喜びの心、自然に対する畏敬の念は子どもの中に見られるに相違ない。それによって私たちは教育のよりどころにしたのである。」（山柘雅信『信仰・教育・研究』武田書店 二〇〇四）。私共はお茶の水女子大学附属幼稚園と私立「まんとみ幼稚園」で、砂場で大規模に水を流し、山をつくり、雄大な遊びが展開されるのを見、その中に科学技術の端緒が観察されるのを見た。その論文の最初にワーズワースの詩の一節、『子どもは大人の父である』が引用されている。「子どもは大人の父」とはおかしくはないか。英文で、最初の「子ども」と「大人」の語には定冠詞が付され、父には冠詞がついていない。この子ども、あの大人、どの人にとっても、子どもは人類の父とでもいえる存在という風には考えたのではないだろうか。

（保育研究者）

私が通った幼稚園・保育園 (13)

保育園、甘き思い出

伊集院 郁夫

バス通りの光に照らされた黒い人影が保育園の門を

くぐり、ゆつくりとこちらに近づいてくる。「おむか

えだ」ポーツとそう思う。保育室の蛍光灯の光は冷た

い。部屋には何もなく、だあれもない。「走って

よ」。

それでも黒い人影はゆつくりと、ゆつくりと歩いて

いる。やっと顔が見えた。今日の迎えは「お父さん

か」。

今から五十年近く前に通った保育園時代の思い出を

ひとコマである。

母の直訴

私が通った「あさがや保育園」は、一九五四年四

月、三歳児から五歳児までの園児四十三名と、園長を



含めた職員六名で、園名からもわかるように、東京都杉並区の阿佐谷の地で開園された社会福祉法人立の保育園である。この保育園の歴史については、保育園史や故三輪政太郎先生の遺稿集に詳しくあるので、ここでは省く。もつとも、私自身、それについて、詳しく調べたこともないので、よくわからないというのが正直なところである。ただ、明治からの民間社会福祉事業の精神が受け継がれてきたと思うのは、開園からわずか三年後の一九五一年に、当時としてはまだめずらしい、ゼロ歳児保育をはじめたことからもうかがい知ることができる。

「あさ保（阿佐谷保育園の略）がゼロ歳児保育をはじめたのは、昭和三十一年、つまり、開園して三年目から。当時『あさ保』と同じ法人の経営の診療所が近くにあった、何かあるとお医者さんがすぐとんでこれるといふ関係にあった、これがゼロ歳児をやられた条件。それにしてもゼロ歳をやるようになった

きっかけは、地域のあるお母さんの、直訴から。銀行に勤めていた人だったけど、食べるためには子どもを産んでも働き続けなければならぬ、何とかしてゼロ歳をやってほしい、とねじこまれた。それで、ああそうか、では、ということになって、ゼロ歳児二人からはじめることになったわけです」

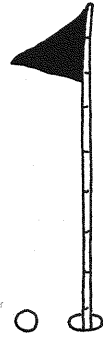
（三輪政太郎遺稿集）

と、ゼロ歳児保育をはじめようになった経緯を当時の園長は記しているが、その「ねじこんだ」母親というのが、当時、銀行でもばりばりの活動家であった私の母である、その押し強さは言わずもがな。温和な園長がその勢いに負かされ、つい「わかりました」と了解してしまった様子が手に取るようにわかる。

ともあれ、そういう理由から通うようになったのが、私の保育園歴のはじまりである。

しかし、こういう歴史的出来事の当事者の私だが、残念ながらその時の記憶がまったくない。もしそのこ

とを回顧できれば、保育の歴史に少しは寄与できたはずなのに残念である。



ある。とともに「まったく覚えていません」としか書けないことに申しわけない思いすらする。特に、二人からはじめられたゼロ歳児保育なのに、初めて友人になった相手が、男子だったのか、女子だったのかさえ覚えていないのだから、保育園時代を語る者としては失格である。本当は、「やさしい先生の柔らかい手でおしめを変えてもらう時が、最高の幸せでした」程度のことは書きたいのだけれど、やはり、あさ保の卒園児は正直者という印象を残すことが今、在園する幼児輩のための最低条件であるのでやめておくことにする。

さて、今回いただいたテーマは「私の通った保育園」。前述したが、五十年近く前の記憶である。だか

らまことに勝手な記憶とおことわりして、ぼつりぼつりとまだらに残る記憶をたどってみることにする。

### 当時のこと

私の生まれた昭和三十年代といえ、一九七三年の石油ショックまで続いた高度成長期に日本が入っていく頃である。つまり「北」と「南」に分断された朝鮮民族同士の戦争があり、それに便乗するかのようになつていった時代である。また、それとあわせて、産業界からは、技術革新と経済成長のために必要な人的能力を確保するという立場から、教育改革が執拗に迫られた頃でもある。

街には東京タワーが建設され、テレビ放映がはじまるが、テレビそのものが各家庭にない時代。最近流行った映画「ALWAYS 三丁目の夕日」そのものの庶民の生活があった時代である。

そうした時代に過ごした私の保育園の印象は、清楚で、かわいらしいというより、むしろ「社会派」の生あくさい保育園で、なにか物言う人々が多くいたような感じのする保育園という印象が残っている。実際に当時、民間の教育運動も盛んで、それぞれに教育実践を含め、社会に意見表明をする教師が多い時代である。あさがや保育園史を読んでも、職員にもその影響がなかったとはいえない。

またあわせて、我が家の一風変わった家庭環境も、そういう印象をもたせる手助けを少なからずしていたと思う。先程の母親もしかりだが、父親も「千万人といえども吾往かん」というタイプの人であったので「君は正しく生きていくのか」というような説教(?)が子どもの頃から繰返される家であったからだ。

まあ、簡単に言ってしまうと、くそまじめなインテリが、子どもにでれーっともできず、かといつて、昔風に威厳を保つ振舞いもできずとまどっていた、とい

うことなのだが……。

話がそれた。保育園に話を戻す。社会派と感じた出来事のひとつを覚えている。

年長になった頃の夏の晩であったと思う。保育園の園庭に大きなスクリーンが設置され、映画会が行われることになった。いったん帰宅してからその映画を両親と観に出かけることになる。夜出かけるということ、当時の私にはかなり興奮する出来事であった。

ましてやその頃は、両親と夜の外出をするなどめったにないことだったので、なおさら興奮していた。

夜の園庭には、わざわざと人が集まっていた。普段とは違う賑わいがあった。そうなる子どもとしては、じっとしてなどいられるはずがない、その人ごみの中を意味もなく走りまわった。ただ走る、それだけで楽しかった。映画を観にきたというより、縁日の賑わいの中にある気分になっていたのだと思う。

さて、いよいよ開演時間。リーンと開始を報せるべ

ルの記憶はないが、大きなスクリーンに映し出された画面と音響には迫力があり、はしゃいでいた子ども達もいつしかスクリーンにむかっていた。そして映し出されたのは……。なんと、当時のベトナムの状況を伝えるドキュメンタリー映画であった。

がっかり、見事にスカである。子ども向けの映画ではまったくない。当然家に帰りたくなかった。それもすぐに。しかし、両親にはそんな思いなど通じていなかった。結局、最後まではいたようだが、私の記憶には、「映画会があった」「早く帰りたい」という記憶しか残っていない。

それにしても、保育園も随分と思いつたことをしたものである。時代がそういう時代であったのかもしれないが、今その類の映画を園庭で上映する保育園など、たぶんないのではないか。まったくもって、すごいところであり、あわせて、すごい親が集まっていたということである。

## 保育実践

まあしかし、あまりこういうことばかり書き連ねると、園が誤解されそうだが、日常は、みな普通に過ごしていた。あたりまえだが、誰しもがスーパーマンやお姫様であり、泣き笑い、傷だらけになって動きまわるガキの集団そのものだった。

当時の保育は「六領域のようなプログラムでやっていた。印象深かったのは、幼稚園では音楽はメロディの美しい歌曲といった歌が多かったけれど、『あざ保』では生活と結びついた歌が多かった」というのは、私たちの担任の回想である。そう、そう、そう、例えば、威勢のいい歌をうたっていた記憶もある。で、そうなる。「ほら、やっぱり」となってしまうのだが、保育実践の草創期、やはりその時代を生きる保育者の試行錯誤が繰返されていたのだと思う。

もともと、万能の保育・教育の方法や指導などはあ

り得ない。指導の手だて・方法は、ある限定された実践的なねらい・目的のために工夫され考え出されるもので、それが達成されたなら、次に向かつて実践は変化・発展しなければならぬのだから、今ほどの保育条件がなかった保育者の苦労は大きかったのではないかと思う。ちなみに六歳違いの弟も同じ園に世話になったわけだが、その間の実践内容は、私たちとは随分と違ったものになっていたように感じた。

### 体を張って子どもを守る時

さて、冒頭に書いたが、私自身、今でいう延長保育の子どもであり、時には二重保育を受けたこともある。だから、寂しくはなかったかと問われれば、「まったく平気」だったとは言いがたい。やはり、先に帰宅する友をうらやましく思ったことは正直ある。それでも保育園が嫌いになったことはない。なぜか？ そう思わせる情熱をもった保育者がいたからだ。そし

て必死に生きていた親たちが、一風変わったかわり方であったかもしれないけれど、体を張って、私たち子どもに向かい合ってくれていたことが大きい。今、子どもに関する政策が変化しようとしている。体を張って子どもを守ることがどういうことか、再び考えなければならぬ時代ではと思う。「子育ては世直しにつながる」。大田堯氏の迫力のある言葉である。

あれっ、つい熱くなってしまった。これも遺伝？  
了。

(新読書社)

### 参考

「あゆみ」あさがや保育園三三年史 一九八七年

「人間・愛・闘い」三輪政太郎遺稿集 一九九三年

(文中の「あさ保」は阿佐谷保育園の略称)

## 私が幼稚園の子どもだった時

今度保育實習科に入つて、子どもに對してゐると、嘗つては、自分がさんかく遊んだ幼稚園の事が思ひ出されて懐しい。かう言つと随分思ひ出がありさうだが、そんなにおぼえては居ないのである。

丁度私はあの頃田園調布に住んでゐた。其の頃の私は今とは全く反對に内氣な社交性のないような子供であつた。両親は近くに幼稚園が設立されたのを幸に、私を入れてしまつた。その幼稚園こそは、K氏のT高等女學校の附屬幼稚園である。

其の時の氣持は餘りよく覺えてゐないが、何しろ今迄、家にじつとしてゐた子供が急に幼稚園といふ所へ放り出されたのだから、之は田舎娘が都會に出て來たような恥づかしいような嬉しいような悲しいような氣持であ

つたらう、幼稚園が出来て最初の園児なのであるから勿論園児の人数は十二人であり、私と同年齡の子が七人あり後は皆年下であつた。七人の中でも女が三人男が四人あつて、女の子は良いにしても男の子と遊ぶ事は始めてなので随分色々泣かされたらしい。

何しろ泣きながら女中と幼稚園の門をくゞり、一旦先生の側へ來ると泣き止むらしいが又お遊びとなると男の子に色々されて直ぐ泣き出してしまふような子であつた。私は幼稚園生活が楽しかつたであらうか。それはわからない。餘り泣くので女中迄一緒になつて泣き出した事もあつたさうだ。今思ふと恥づかしい氣がする。幼稚園へ行くと、先づ最初にオルガンに合せて結んで開いて手を打つて……云々といふのを何回もやりそれからお部

屋に入り細工的な事をやらされたらしい。

特に幼稚園でやったものを今のぞいてみると折紙や細い紙で作ったもの等が多い。他に豆細工等はおそらくやったであらう。お遊びの時はお砂遊びおすべり、ブランコ等でジャンゲル等といふ氣のきいたものはないのである。此のお遊びの時は私はいつも男の子に泣かされては、其の時の一番若い嫁婦さんたる先生にすがりついて涙をぼろ／＼出してゐた。お遊戯はどんな事をやったかそれは覚えてゐないが、それをやる事は好きらしかった。

(以下略)

B 子

G 縣O市にあつたMミッションといふ名前のミッションの幼稚園であつた。

園長先生はYと云ふフランス人の女の方で背の高い優しき素朴な先生だつたと記憶してゐる。

園児の数は約三十人で嫁婦は三人だつた。朝とお歸りの時刻はこゝの幼稚園と同じ頃だつた。家から幼稚園迄は近かつたしお隣の方と何時も御一緒だつたので送り迎

へは別にしなかつたそうである。バスケットにはお辨當の他にお八つを持つて行つた様に憶えてゐる。

私の一番嬉しかつた事は、公園だつたか野原だつたか散歩の様な遠足に行く時だつた。又お遊戯室等なかつたのでお庭にオルガンを出してそのまはりに集つてお唱歌やお遊戯をした。私はお唱歌が大好きだつたらしい。

『お人形』や『日の丸』の歌等獨唱した様だ。

私は保育科に入る迄は幼稚園では今述べた事がお遊びであつて、お室で豆細工のブランコをつくつたりお人形をつくつたり折紙で鶴や奴さんを折り又ぬり繪をしたり繪をかいいたりする事がお勉強だと思つてゐた、だから一人で出来たのかしらと思はれる様な細工物を手に持つてお家へ歸るのがとても誇りだつた。

私は大きくなつてからも幼稚園というところすぐ豆細工の豆を嫁婦が煮てゐるのを聯想してたものだつた。そして幼稚園といふ處はいろ／＼細工を教へてくれるから小学校へ上つた時随分樂でいゝと思つた。

そしてたゞ遊ばせておくのはよい幼稚園ぢやない等い

つて小學校へ行つてからも幼稚園で教はつた事を自慢し合つたが豈はからんや、此の保育科で學んだ幼稚園の目的なるものをよく／＼考へて見ると、我々の自慢してゐた幼稚園は大分餘計な事を教へてくれたのだと思ふと共に今更の様にあの目的に實によく叶つてゐる此の女高師附屬幼稚園の園児を羨しく思ひ且つ責任の重い事を身に感ずるのである。

E 子

1、粗末な建物を第一に思ひ出します。

2、幼稚園のお花畠には眞赤なけしの花の澤山咲いてゐたこと。

3、楽しい遊びとしては、お砂場で、お山をこしらへたこと。(水を入れて砂をかたくして、)木の器に砂を入れて形を抜き出してお饅頭屋さんをして遊んだこと。

ぶらんこ、本校に遊びに行つたこと。ぬりゑ、おゑかき(特にぬりゑは好きでした)。お遊戯の後にするスキップ。粘土。

4、ばあやによく叱られたので怖い人だと思つてゐたこ

と。でも私がいつか鼻血を出してしまつた時洋服のよごれをすぐに洗つてくれました。

5、この頃ではお友達同士の呼び合ふのを聽いてゐると、「花子さん」、

「太郎さん」と名前で呼んでゐる様

ですが、私達はどうかだつたでせう。時々卒業の時の寫眞を見ると姓名が一緒に思ひ出される所を見ると、姓名を言つて呼び合つてゐたのではなかつたかと思ひます。「イチシマトシヲちゃん」とか「サノヨシコさん」とか言ふ風に。

6、私の組の時の先生はH先生でした。保育實習科からいらつしやつた方ではS先生と言ふ方だけを覚えてゐます。

7、豆細工、南京豆つなぎ等は私達の時にはあまりしなかつたからか一寸も覺えて居りません。

8、三月三日のお節句の時にはみんなで菱餅を頂いたこと。





9、實習科の先生にクローヴァで首飾りをこしらへて頂いたこと。本校に行つて随分クローヴァのお花をつみました。クローヴァのお花の臭ひをかく時何時も「幼稚園の臭ひがする」と言ふのです。

お遊戯の中で好きつだつたものは

雀の子、桃太郎さん、凧、水兵、飛行機、木の葉。もう忘れてゐたおうたでもお習ひしたものはまた思ひ出されて、何とも言はれぬなつかしい氣が致します。又お遊戯等も私の頃のと同じのが續けられてゐるのを見ると本當に嬉しう御座います。

G 子

私の家が父の轉任でN縣K町へ行つて間もない頃、私はお唱歌とお遊戯がとても好きだつたので、幼稚園や園長さんのお名前は忘れましたが、近くのお寺の境内にある、幼稚園へ入れてもらひました。中途から入つたので何にもわからず、皆のするお唱歌やお遊戯は私の知らないものばかりだつたので初めの二三日はとても厭でした。

殊に土地の子供達と言葉が違ふので心細い氣持ちでい

つばいでした。ですから今でも、長くお休みして居たお子さんの心細さが良くわかる様な氣がします。

又、「何て意地悪そうな強そうな子の澤山ゐる所なんだろう」と恐くて仕方ありませんでしたが、お唱歌やお遊戯がしたい爲に一日もお休みしないで通ひました。(中略)

或る時お庭で四組位に分れて、輪くゞり競争をさせられました。私は厭だと言つて泣きました。出来ないからと言ふより何とはなしにするのが厭で堪らなかつたのです。

ですから今ラヂオ體操をするのを厭だと云つて、どうしてもしない子も、あの時の私と同じ様な、言ふに言はれぬ氣持で居るのではないかしら、と時々思ひます。それから圖畫の時は、「先生が下圖をとつてあげるからお待ちなさい。貴女は何を書きたいの?」と聞いて廻ります。その番の來るまでおとなしく待つてゐるのです。そして番が來ると自分の書きたいものを言ふと下圖して下さいました。上手に出來ていゝと思つたこともありましたが自分の書きたいものを言ひ表すのに骨が折れました。

豆細工、貼紙等は先生のやつて見せる通りのものを作り或る物を観察して思ひの儘やるものではありませんでした。

又お辨當をお晝にお家から届けてもらう時など少し後れたりすると、先生が柱の所へ行つて「チリ〜、モシ〜何々ちゃんがお辨當を待つて居ますから早く届けて下さい」と電話の眞似をなさいますと、いつもすぐ届くので本當に不思議でした。

又、齒が痛くなると、先生が梅ぼしをつけて下さいますので私は、齒がいたくなればいゝ、など何度も思ひました。斯様にして、どれくらひだつたか忘れましたが、ほんの少し通ひました。

今でも子供達がやつてゐるお唱歌や遊戯の中に私の幼稚園時代にお習ひしたのがあると、あの頃を思ひ出して、懐しく又寂しく思ひます。

J 子

私の家から約半丁の所に幼稚園がある。

そのK幼稚園には、太つた金齒をずらつと竝べた世話

役のお婆さんと園長先生である所のO牧師と先生が二人許り居た。始業時間等、きつちり定つていて、朝禮の代りに「お早う先生御機嫌いかゞ、おはよ皆さま、ごきげんいかゞ」といふ歌をうたつたらしい記憶がある。その歌はその朝も幼稚園から聞えてくるので、はつきりおほえてゐる。

それがすむと小さい組と大きい組に分れて疊敷きのお部屋へ入り先生のお話をきいたり、貼り紙をしたりする。そしておやすみ時間にはお庭へ出て、ブランコとお砂場あそびと、すべり臺のどれかをするのである。

貼り紙といつても、折り紙でやるのではなく、あのかやく〜した色紙で丸や三角やおしどりや蝶々やサクラなどに切りぬいてあるのがあたへられ、適當な所に適當なものをはりつけて足りない所はクレイオンで補ふのである。生來不器用な私は時々その奇抜な晝帳を出してみてもおかしくて吹き出してしまふのであつたが何かのはづみにそれをなくしてしまつた。

私が女高師の幼稚園を見て先づ驚いたのは時間的制限

を受けていない事である。確かに遊戯の連続を行つてい  
る。

私は幼稚園に於て學校的訓練をうけて來た。その束縛  
のない事である。程度の低い設備の整はぬ幼稚園をみな  
れて來た私は、すっかり女高師の幼稚園に満足してしま



つた。

之丈の事を漸く思ひ出したが實察私は幼い頃の事をす  
つかりわすれてしまつたのである。(以下略) K 子

(原文は一部修正、現代仮名遣いを使用した。編集部)

今回のアーカイブズは、昭和十三年(一九三八年)発

行の「幼児の教育」(第三八卷九月号、四五―五六頁)

に掲載された「私が幼稚園の子どもだったとき」という  
記事である。保育者を志す十一名の「保育実習科」学生

(明記されていないが東京女子高等師範学校に間違いな  
かろう)が寄稿した、自らの幼稚園時代の回想録だ。こ

こではそのうち六名の文章を抜粋転載する。そこでの序  
文には、「将来幼稚園の先生にならうとしてその修業に  
志した若い人たちが、自分等の幼稚園生活を思ひ出して  
見たのも面白い。順不同(編集部)」とある。大正期の

幼稚園を、子ども自身がどのように過ごしていたかを垣

間見る資料ともなる。戦争の色濃くなる中、この人たち

はどのような保育者となつていったのだろうか。くしく  
も連載中の「私の通つた幼稚園・保育園」(現代版)と

二重写しの企画となつた。

☆この連載は、日本の幼稚園創設百三十年を迎え本誌の昔年の

記事を振り返り、現在の私たちの立ち位置を確認する作業の一  
助にと企画したものです。

# 「恩師」との出会い

本間 万里子

私は、人前に立つことも思いを言葉にすることも  
本当に不得意で、教員という職業に向いていません。

にもかかわらず、勤めてから早三年。反省したり  
落ち込んだりダルマのように転がり、沈没船のよう  
に沈みつつも、何とか息ができています。

それは、心から「恩師」と思う二つの存在のおか  
げだと、感謝しています。

ひとつの「恩師」は、日々成長する眩しい生命で  
す。

年少組では、大好きなお母さんと離れて過ごすこ  
とが大事件でした。

とにかく泣いて泣いてお母さんだけを求める子ど  
もと、なんとか安心して過ごせるように好きな遊び

や友達を探る大人と、日々戦いです。

そんなある雨の日、Yちゃんが「先生、ちょっと来て」と私の手を引つ張り、テラスまで行きました。「どうしたの?」ときくと、「あのね、葉っぱが泣いてるの」「あ、本当だ!」。

しばらく二人で葉っぱが泣いている様子に見とれていました。そこへいつの間にかKちゃんも加わって「たくさん、たくさん、泣いてるね……」。

思わず私が「葉っぱがたくさん。涙がたくさん。悲しいってことなのかなあ?」。すると、Yちゃんが「楽しいんだよ。だって、いっぱい泣いてるから!」。Kちゃんも「一人じゃないもんね」と、につこり。

その二人は、とても仲良しの相棒になりました。

年中組になると、ウサギにごはんを持ってくる仕事が増えます。

初めてウサギに出会ったときには「何だか怖い」「目玉が大きくて飛び出そう」と逃げ腰だったTちゃん。しかし、近づきたい気持ちはいっぱいのおかげで、毎朝ゲージの外から、のぞきこんでいました。

三日目の朝、Rちゃんが小松菜をあげているのを見て、「一緒にあげてみたい……」とつぶやきました。その声をそっとRちゃんに伝えると、「Tちゃん! おいで!」と誘ってくれました。

こわごとと小松菜を差し出すTちゃん。「わー! もくもく食べてる!」「でしょ? 小松菜好きなんだよ」「ひげ、いっぱいあるんだ!」「そうだよ」「あ! 黒いのが一本だけある!」「え? どれどれ? 本当だ! 知らなかった!」「なでもいいかな?」「そーっとね」「……あったかいね」「どきどきしてしてる」二人は、そんな会話をかわしていました。

その後、自分は苦手だった小松菜を、大好きに

なつたそうです。

年長組になると、年中児を部屋に招待して、一緒に遊ぶことになりました。

手作りのトロッコに、年中児を乗せて年長児が引つ張り、部屋を一周します。

引つ張る前にはこんな会話がありました。

自分よりも体の大きな年中児を連れていたMちゃん。

「(引つ張るスピード) 速いのと遅いの、どっちがいい?」

「……速いの」

「えー、速いのは引つ張るの大変だし、危ないよ。

遅いのでいい?」

「……(うなずく)」

二周目にも再び「速いの」と言われると、

「じゃあ、ちょっと速くしてあげる!」

「俺についてこい!」と強気のHちゃん。

「(引つ張るスピード) 速いのがいいよな」

「うん! 速いの!」

それを聞き、張り切つてスピードを出しすぎ、壁にぶつかつてしまいました。大あわてで年中児の前に駆け寄りしゃがみ込んで、

「ごめんね、ごめんね……大丈夫?」

それからは、年中児を肩越しに振り返りながら、スピードを調節していました。

「ここを持ちたい!」と言って、引つ張るロープを

掴んで離さない年中児に、困つてしまったEちゃん。

「ここ、持ちたいの? でも、ここ持たないと私が

引つ張れないの」

「私が引つ張る」

「でも、乗ってる人は引つ張れないよ」

「……」

「乗ってる人がここ持ってたら、ケガしちゃうよ」

「……」

「乗ってる人は、手、ここに置いてね」

「うん」

後日、年中児が絵手紙を持ってきました。

「楽しかったです」「また遊んでね」という声に、

「どういたしまして」「いいよ」「いつでも遊んであげるよ」と誇らしげ。

しかし、年長児だけになると、Rちゃんが口火をきりました。

「もう絶対やだ！ 疲れちゃうし、俺、全然遊べなかつたし、もう絶対やりたくない！」

私は、それももつともな気持ちだと感じました。

「その気持ち、すごくよくわかるよ。だってRちゃ

ん、いっぱい走ってたもんね」

「そうだよ。だって年中の子、いきなり走っていったら大変だったよ」

「そう！ トロツコ乗り場でも、危ない道を走っていったら追いかけて、『ここは危ないんだよ』って教えてる所、みたよ」

すると「……そうだったっけ？」と照れた様子の

Rちゃん。

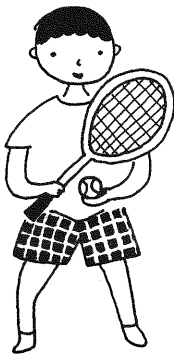
「そのおかげでケガしなかつたし楽しかったと思うよ……でも、他にも大変だったし疲れちゃった人、いるんじゃないかな」

「俺も！ 全然話さかないし、しゃべらないし、勝手にあっちの方いっちゃうし、大変だったよ」

「二人いたんだけど、一人

は動きが早い

人で一人は遅



い人だったから、忙しかった〜」

「本当に、そうだったね」

すると、いつもは口数の少ないYちゃんが口を開きました。

「でも楽しかったよ！ だってトロッコおるとき『楽しかった〜』って言って、にっこりしたもん」

「トロッコ二人乗りで引つ張ったら、びっくりした。俺って力持ちなのかな〜」

「『トロッコ大好き！』って言ってた！ また乗せてあげてもいいな」

自分は遊べないし、相手には気をつかうし、気をつかっても反応は十人十色。年長組は本当に大変だったし、疲れたと思います。

年中児がいる前で、その本音が出なかったことに、成長を感じました。そして、年長児だけになり、

安心して本音が出せたことを、嬉しく思いました。

その本音をきいて、さらに、子どもたちから「でも楽しかった」という声が出たことは、頼もしいと思えました。

もうひとつの「恩師」は、『学びびたり、教えびたる世界』を教えてくれる先輩の保育者です。

『生き生きとした集団は、星座のようだ。』

夜空には大きい星・小さい星・明るい星・暗い星・暖かい星・冷たい星・遠い星・近い星・赤い星・青い星……様々な星がある。

それぞれ輝いている星を、より大きな視点で見ると、ひとつの形を成している。』

子どもと接するとき、よくこの話を思い出しました。

普段とは違う時間の流れで、全ての感覚をときぎますこと。一人ずつ「この子はどんな星なのかな」



と近づくとときが一番楽しくて、どきどきわくわくします。

とにかくミミズが大好きだったり、木の枝が大好きだったり、石が大好きだったり。

新たな一面をみせてくれると、対応している自分の中からも、今まで知らなかった面が引つ張りだされる気がします。また、他の保育者や保護者から「こんなことがあったよ」ときかせてもらうと、さらにその子が好きになります。

一つひとつの星が、さらさらした好奇心によってひとつの出来事に集中し、「どうしたらいいんだろう」と自分の頭で考え、「やりたい！」というプラスのエネルギーがあふれてくる。何よりも大好きな空間です。

そういう理想を、言葉や理屈ではなく、共に生活をする中で自らが実践し伝えてくれる先輩の保育者を尊敬しています。

いちばん大切なものは、もうだめだと思ったときにこそ、いっそう輝き出すというのは本当で、「恩師」あつての自分です。

『楽しくなくちゃ保育じゃないのよ。まずは自分が楽しいと思わなくちゃ』

『短所をなくそうとすると、長所もなくなるのよ。いいところをのばしていかなきゃ。これは子どもも、大人も、同じ』

何にでも涙ぐんでいた子が、顔から熱いよく転んでもすぐに立ち上がり、大好きな友達を追いかけ走っていく姿。

向いていないとしても、『恩師』と時間を共有できることは、何よりも幸せで宝物です。

力不足を努力で補えるよう、走れるところまで走って、追いかけていきます。

(白金幼稚園)

# 編集後記

「遠足」を特集した。私の記憶から  
—小学校中学年のころか、水筒には  
ぜったいコーラを入れてくれと頼  
み、母はその願いを聞き入れてくれ  
た。昼、嬉々として水筒から飲んだ  
コーラは、生ぬるくべつとりと甘  
く、母手作りのいなりずしとは「合  
わない」とはつきり認識した。  
遠足の醍醐味は、いつもとちがう  
場所に、慣れ親しんだ仲間と行く、  
というところだろう。レルフによる  
と、人間は「からだ」というもつと  
も基本的な場所から、徐々に自分の  
なれ親しんだ場所を拡張し、時には  
その場所を越境しようとする特異な  
動物らしい（「場所の現象学」）。

その典型は「旅」だが、幼稚園で  
は厳密な意味での旅はしない。遠足  
はじゅうぶんな下見と環境設定がほ  
どこされた「旅」だから。

遠足は、生活に裏づけされた、家  
庭や園という「場所性」に満ちた本  
拠地を持つから、楽しいのだろう。  
自分の馴れ親しんだ空間の外にも、  
そこにはその時間が流れ、尊重す  
べき「場所」があると感じられる想  
像力が重要なのではないか。自然の  
中には、植物、昆虫、鳥たちの生き  
る場所があり、貝塚遺跡にはそこで  
かつて生活していた人々の余韻があ  
る（鈴木先生）。デイズニールン  
ドや遊園地のような、外部から意味を  
据えつけられた空間の特質を、レル  
フは「没場所性」と呼ぶ。（浜口）  
\*本誌へ投稿、感想お寄せくださ  
す。youjinmail@yahoo.co.jp

## 幼児の教育

第一〇五巻 第九号

(二〇〇六年九月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十八年九月一日

編集兼発行人 浜口順子

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8600 東京都文京区大塚二二一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8620 東京都港区三田五二二一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三三五三九五五六六二三(営業)

☎〇三三五三九五五六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇一―一九六四〇

☆ 本誌へ購読のご注文は発売所フレール館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

好 評 中!  
発 売

# 食を育む

総監修 師岡章  
著 倉田新・徳永恭子・  
野村明洋

食育実践ガイドブック

「食育」という言葉を、  
「食を育む」(子どもの生活の中に存在するもの)と  
捉えることを前提とし、  
食育に関する実践方法・事例を、  
イラストや写真を豊富に用いて、  
具体的に楽しく紹介します。



26×21cm/160頁  
定価2,100円(税込)

## 【目次から】

- 子どもがががやく食育実践の進め方 ●食育のすすめ方と実施時期のめやす
- 食育実践方法の選び方
- PART1 農で食を育む ●PART2 料理で食を育む
- PART3 環境構成で食を育む ●PART4 遊びで食を育む
- 保護者・地域に向けての働きかけアイデア
- 資料(保育所における食を通じた子どもの健全育成  
(いわゆる「食育」)に関する取組の推進について/  
楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～/食育基本法)

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

平成17年5月、  
保育所のための第三者評価ガイドラインが、  
新たに生まれ変わって国から示されました。  
本書では、この新・ガイドラインを  
詳細に解説していきます。

# 保育所の新・ガイドライン の 第三者評価の 読み方・受け方

—自己を点検し、評価を受ける—

小笠原文孝・小出正治 共著



A4判/338頁  
定価2,940円(税込)

## 【目次から】

### PART1 第三者評価総論

- 1・第三者評価とは？  
その本質と意義・目的
- 2・望まれる評価機関のあり方・  
評価者が具えるべき資質
- 3・さまざまな評価の視点  
～「何を」「どこまで」評価するか～

### PART2 評価基準ガイドライン解説

- 評価分類Ⅰ 福祉サービスの  
基本方針と組織
- 評価分類Ⅱ 組織の運営管理
- 評価分類Ⅲ 適切な福祉サービスの実施
- 評価分類A

### PART3 資料

キンダーブックの

## フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。